

保元・平治物語における「奉る」「参らす」「申す」

川岸 敬子

はじめに

さきに、『平家物語』の謙譲の補助動詞「―奉る」「―参らす」「―申す」の差違について、待遇価値・上接動詞・話手の性別・話しことばのか書きことばのか・場面の諸点から調査を行なったが、その結果は次の通りである。

- (一) 待遇価値は「―奉る」より「―参らす」の方が高い。
- (二) 「―申す」は発話行動に関する動詞に接続しやすく、その傾向が顕著である。又、割合かたい語感の語として意識されていたらしく、男性のことば・書きことば・公的な場面に使われやすい。

(三) 「―奉る」は使役の助動詞「す・さす」を伴う動詞・動作など一般の行動を表す動詞に接続しやすい。漢語動詞にも活発

に接続する。かたい語感を持ち、男性のことば・書きことば・公的な場面に使われやすい。

四 「―参らす」は受身の助動詞「る・らる」を伴う動詞に接続しやすいが、漢語動詞にはあまり接続しない。やわらかい語感を持ち、女性のことば・話しことばに使われやすいが、公的な場面では使われにくい。

以上の結果を得た後、私は次のような趣旨のことを述べた。

この結果は各調査事項を独立させて検討して得たものである。それ故、たとえば『―奉る』には甲が多い」といつても、本当にそうであるとは限らず、『―奉る』にはaが多い」「aには甲が多い」という二つの事実の組み合わせの結果、たという可能性もあるわけである。右の(一)～(四)の中

に、そのようなものはないだろうか。

『平家物語』で得た結果のうち、「―奉る」「―参らす」「―申す」の性質として認められるのはどれか。それを知るために、私は中世の他の作品についても同じ方法で調査することにした。他の作品でも同じ結果の得られるものは、そのまま三語の差違として認めてよいと思われるからである。(異なった結果の出る事項については、右のような条件の積み重ねの他、条件の強弱や時間の経過に伴う性質の変化、作者の出身地の違いなどが考えられそうである。)

今回は、中世の作品として、平家と同じく軍記物語である『保元物語』『平治物語』を取り上げることにした。テキストは日本古典文学大系本である。

大系本の底本はその解説によると、第四類本の中の代表的伝本の一つである金刀羅宮蔵本である。現存本中で最初に形成されたと思われる第一類本の成立は承久以前の鎌倉初期、第四類本の成立は文安三(1446)年以降かと言われている。

前にテキストとした日本古典文学大系本『平家物語』の底本は、覚一本の転写本である龍谷大学図書館蔵本である。これも古典大系の解説によれば、原平家の成立は十三世紀初頭、十二巻形態になったのは十三世紀半ば、そして覚一本の成立は十四

世紀初頭以後ということであるから、大系本の『平家物語』と『保元物語・平治物語』とは成立過程の時期に重なり合うところも多いといえることができる。

なお、『保元物語』と『平治物語』とは同一作者によるものかどうか問題になるような二作品であるので、各調査事項ごとに両方を併記して叙述していくようにした。

一 概観

動詞(十助動詞)の連用形に直接接続し、動作の受手に対する敬意を表す謙譲の補助動詞は「表1」の通りである。「―奉る」はラ行四段活用、「―参らす」はサ行下二段活用、「―申す」はサ行四段活用である。

〔表1〕

平	治	元				地	文	会	心	中	思	惟	文	書	計
		保	参らす	申す	奉る										
申す	参らす	奉る	参らす	申す	奉る										
4	26	63	0	38	25	70									
7	34	30	1	23	26	62									
1	4	4	0	1	3	13									
0	0	0	0	0	0	4									
12	64	97	1	62	54	149									

平家の場合と同じく、いずれも「一奉る」を最も多く使用している。保元では「一申す」が「一参らす」を上回っているのがめだつ。

二 待遇価値

まず三語の待遇価値について調べてみた。方法は、大体において平家と同じく、(I)対応による方法、(II)身分・地位による方法、の二つである。

(I) 対応による方法

1 尊敬語との対応

この方法は、次の例で言えば、「たのみたてまつる」の受手、左府について用いられた尊敬語「給ふ」の待遇価値との関係において「一奉る」の待遇価値を知ろうとするものである。

Ex¹ 海とも山ともたのみ^{なりたまし} たてまつる^給 左府はいひ甲斐なく^(保元122頁)

このような対応は、すべて同一文内に限って見ることにした。

その前提として、尊敬の助動詞・補助動詞が語り手の一定している地の文でだれに對して使われているかを調べた。待遇の対象を神仏・皇族・摂関(とその君達)・その他の四つに分けると、「表2」の通りである。

ど様な対象に對して用いられているかによって、尊敬の助動

詞・補助動詞を「表2」のように、A・B・Cの三グループに分けることができる。

〔表2〕

C		B		A						
給ふ (ら)る		あり(なし) し	せ給ふ (さ)せ給ふ	なる	まします	おはします	せおはします	(さ)せまします	(さ)せおはします	(9)
3		1	5							神仏
16 15		19	95	6	4	1	1	6	9	皇族
5 23		4	38	1						摂関
24 15			1							その他
1										神仏
4 3		4	17	5					1	皇族
										摂関
186 149		1	4							その他

保元では、皇族専用と言つてもよいのがA、摂関にも用いられるのがB、その他にも多く用いられるのがCということになる。

平治でも、皇族専用がA、その他にも使われるのがB、その他に非常に多く使われるのがCということになる。そして、

保元との間にはA・B・Cに属する語のくいちがいはない。因みに、このA・B・Cは平家においても同じであった。待遇価値は高い方から順にA・B・Cとなっており、この待遇価値は地の文のみならず会話・心中思惟・文書にもかなり共通していることが予想される。

右のA・B・Cに平常語Dを加え、「―奉る」「―参らす」「―申す」がどれに対応しているかを見ると、「表3」の通りである。（地の文・会話・心中思惟などの区別はしなかった。）

〔表3〕

元	保	治	平
―奉る ―参らす ―申す	―奉る ―参らす ―申す	―奉る ―参らす ―申す	―奉る ―参らす ―申す
A	2	2	2
A B	1	1	
A B C	1		
B	13	8	18
B C	2	1	
C	2	1	9
D	1		
計	18	14	29

・ 数字は謙譲の補助動詞の数。

・ 「御ゆるし候」の類は「―あり」に入れた。

Ex2

「A」保元に讃岐院御幸なりしを、寛弁法務の坊へ入（いれ）まいらせられしに、此君（筆者注 後白河上皇）をばおも

んじまいらせたまふ。

（平治215頁、地の文）

Ex3

「ABC」五の宮は、故院の御孝養の爲にとて、鳥羽殿へいらせ御座あひだにてわたらせ給ひけるに、急告「申」たりければ、大にさはがせ給（たまは）て、（略）とて、やがて内裡へ申されければ、
（保元128頁、地の文）

Ex4

「C」御菩提をもとふらひ たてまつり、一業をもうかび給ふかと思ふにこそ、小刀・檜木をばたづめれ。

（平治275頁、会話）

最も高い場合、どのレベルの尊敬語と対応するのを見るとき、平治では「―参らす」がA、「―奉る」がB、「―申す」がCであるから、待遇価値は高い方から順に「―参らす」「―奉る」「―申す」だと考えることができる。

保元の場合、「―奉る」「―参らす」がA、「―申す」がAB Cであるから、「―申す」が他の二語より待遇価値の低そうなのは認めてよいが、「―奉る」「―参らす」はどうか。

そこで平家の時と同じく、B以上の対応例の比率を調べてみると、「―奉る」20/29、「―参らす」12/14であり、「―参らす」の値の方が大きい。この値が大きいほど、その謙譲の補助動詞の待遇価値は高いので、「―参らす」の方が待遇価値が高いことになる。念のため、同じ方法を「―申す」に適用すると、B以上の比率が14/18となり、「―奉る」より値が大きく、待遇

価値が「―奉る」より高いことになる。「―参らす」よりは低い。」

以上の事から、保元では「―参らす」が他の二語より待遇価値の高いことだけがはっきりしていると見える（「―奉る」「―申す」の関係は調べ方によって結果が異なるので不明である）。ただ「―参らす」のD1例が問題だが、これは次のような自敬的な用法なので、他と同列に考える必要はないであろう。

Ex5 志は誠にさることなれ共、我身計こそ、縦敵襲来とも、手を合せ、降をこはむに、などか助まいらせざるべき。

（122頁、崇徳上皇のことば）

以上、この方法によると、保元・平治では「―参らす」の待遇価値が最も高いことになる。（平治について、B以上の比率を求めても前述の結果と同じである）

平家の場合、同一文に限って、地・会話・文書における対応を合計して示すと、次のようである。

〔表4〕

―奉る	―参らす	―申す	
2	1	3	A
0	1	0	A B
31	26	7	B
1	1	3	B C
53	2	10	C
2	0	2	D
89	31	25	計

Bまでの比率は「―奉る」33/89、「―参らす」28/31、「―申す」25/89、

す」10/25である。これによると、平家では「―参らす」「―申す」「―奉る」の順ということになる。「―参らす」の待遇価値が最高である点で、保元・平治と等しい。

2 丁寧語との対応

会話の中には、いわゆる丁寧語の「候ふ」「さぶらふ」の使われているものと、使われていないものがあるが、一般に「候ふ」「さぶらふ」の使われる会話は使われない会話より、話手の聞手に対する敬意は高いと言つてよい。(12)それを、一人称者の二人称者に対する動作「1P→2P」に使われる謙譲の補助動詞の待遇価値を知るための一つの手がかりにしようというわけである。

この場合、「候ふ」「さぶらふ」は現代語の「です」「ます」と異なり、現れるとなればすべての文末に現れるという性質のものではないので、同一会話中に一つでも「候ふ」「さぶらふ」があれば、「1P→2P」に使われる謙譲の補助動詞と丁寧語とが対応していると見てよいかと思うのだが、やはり対応の安定度を考え、同一文だけについて見ることにした。

Ex6 左府失給て後は、各をこそ深頼^{ふかくたのまひまつり}「奉」候へ。

（保元166頁 入道殿下↓孫達）

Ex7 敵の手にかゝり候はんより、御てにかゝりまいらせん事こそ畏て候。（平治254頁 朝長↓義朝）

会話の状況は次の通りである。

〔表5〕

補助動詞	候ふ・さぶらふ			保元	平治
	―奉る	―参らす	―申す		
有	2	6	3	有	
無	3	0	4	無	
有	1	5	0	有	
無	2	5	5	無	

○数字は謙譲の補助動詞の数

○「候ふ」「さぶらふ」の使われているものを有、使われていないものを無とした。

「有」の割合が大きいほど、その謙譲の補助動詞の待遇価値は高いと言える。これによると、保元では待遇価値の高い方から順に、「―参らす」「―奉る」「―申す」となり、平治では「―参らす」「―申す」「―奉る」となる。他の二語に比べて「―参らす」の待遇価値が高いという点は、保元・平治共通である。平家の同一文内での対応の結果は、「―参らす」「―申す」「―奉る」の順であり、平治と同じである。

なお、この方法は文書にも適用できる性質のものであるが、文書は保元の「―奉る」4例のみなので、ここでは利用できない。

(II) 身分・地位による方法

謙譲の補助動詞が地の文で、どんな身分・地位の受手に対して用いられているかを調べて、その待遇価値を知ろうとする方法である。

法である。地の文としたのは、語り手が一定であるために、謙譲の補助動詞の待遇価値と身分・地位との間に相関関係が見られやすいと考えたからである。

動作の受手を神仏・皇族・撰関(やその家族)・その他の四つに分けると、それぞれに使われる謙譲の補助動詞の数は「表6」の通りである。

「その他」というのは最も身分・地位の低いものであるから、この比率が高いほど、その謙譲の補助動詞の待遇価値は低いことになる。

〔表6〕

	保元			平治		
	―奉る	―参らす	―申す	―奉る	―参らす	―申す
神仏	3	0	1	7	0	3
皇族	40	21	30	70	25	38
撰関	20	4	4	0	14	0
その他	7	0	3	54	9	3
計	70	25	38	63	26	4

保元ではその他の比率は「―奉る」7/70、「―参らす」0/25、「―申す」3/38であるから、待遇価値は高い方から順に、「―参らす」「―申す」「―奉る」である。

平治では「―奉る」54/63、「―参らす」9/26、「―申す」3/4であり、待遇価値の順は保元と同じである。この順は平家でも同様であった。

ところで、平家を扱った時、話手がさまざまに変わる会話で

は地の文のように身分・地位だけで調査するのが無意味であることから、少し方法を変え、受手が明らかに話手より上位であるものと、そうでないもの（「その他」とした）の数量を調べ

た。この場合も「その他」の比率の高いものと待遇価値が低いことになるが、その結果、待遇価値の高い方から順に、「―申す」「―参らす」「―奉る」であるという、他の調査と著しく異なる結果（「―参らす」が最高でない）を得た。これについて「その他」の内容、話手が顧慮せざるを得ない聞手を持つ会話、引用会話文、「―申す」の用例数の少なさ、自敬表現などの点から検討してみたが、右の結果に影響を与えることはなかった。

その後、この調査では受手＝聞手（あるいはそれに準ずるもの）の場合と、そうでない場合との区別をしていないことに気づいた。現代語では、当人が居合わせなければ「あの人、行くかしら？」と待遇するような関係でも、面とむかつては「いらっしゃる？」と言ったりするようなことは珍しくない。二人称として扱う場合と、純然たる三人称として扱う場合とは、待遇の度合いが違ってくるわけである。

このような意識が平家の時代にもあるなら「受手＝聞手」の例が「その他」の比率に影響を与えているということも考えられる。試みに「その他」の中に「1P→2P」（つまり為手＝

話手、受手＝聞手）に使われた例がどのくらい含まれているかを見ると、次の表の通りである。

〔表7〕

―参らす ―申す	その他		
	6	44	83
―申す	2	23	30
	うち 1P→2P		

〔表7〕によると、
「1P→2P」が「その他」の中で占める割合は、「―奉る」30/83、
「―申す」2/6で、ほ

ぼ1/3なのに、「―参らす」だけは23/44で、1/2を越えている。これは平家の他のデータに従えば、「その他」という、受手が話手に対して必ずしも上位者とは言えない人間関係の場合でも、受手が聞手（この場合、同時に為手が話手であるが）であるため、高く待遇したいという意識が話手に働き、待遇価値の高い「―参らす」を選んだと解釈できるものである。

そして「1P→2P」が「―参らす」に割合集まりやすいため、「その他」の数がふえ、その比率が「―申す」の「その他」の比率をわずかながら上回ることがあっても、不思議ではないと思う。

以上述べて来たような事が、もし成り立つならば、平家においてこの方法で得られた結果（待遇価値の高い方から順に、「―申す」「―参らす」「―奉る」であるというもの）は、そのまま認めることが出来ないということになる。そこで、本稿で

はこの方法は採らないことにした。

Ⅲ) まとめ

これまでの調査によると、保元・平治とも方法によって待遇価値の高い方から順に、「―参らす」「―奉る」「―申す」となったり、「―参らす」「―申す」「―奉る」となったりしているが、いずれの場合でも「―参らす」の待遇価値は他の二語よりも高い。

平家の場合、Ⅱ)の会話における調査で、「―申す」が「―参らす」を上回ることがあったために、「―参らす」が「―奉る」より高いという結論だけを出しておいたが、前述したような理由により、その調査を一応除外すれば、保元・平治と同類の結果を得たことになる。

Ⅳ) 本動詞としての用法

本動詞「奉る」「参らす」はどちらも「さしあげる」意味を持つので、補助動詞の場合と同じ方法を使って、待遇価値を比較することができる。

同一文内でのような尊敬語と対応しているかを見ると、「表8」の通りである。

〔表8〕

			保元
参らす	2	1	B
奉る	2	0	B
	3	1	C

が、一応、Bに2例現れる「参らす」の方が待遇価値が高いことになる。

丁寧語との対応は、保元には二語が「1P→2P」に使われた例がなく、又、平治には会話の「奉る」の例がないので、調査が不可能である。

次に、地の文において、受手の身分・地位を調べると、左の通りである。

〔表9〕

	参らす	奉る	皇族	保元	平	皇族	平治
	5	4	撰関			撰関	
	1	2	神仏			その他	
	2	1					
	7	1					
	0	0					
	2	2					

保元では「参らす」の方が皇族の割合が多く、平治でも「参らす」の方が皇族以上にかたよって使われる。これらのことから「参らす」の方が待遇価値が高いと言える。

以上、本動詞「奉る」「参らす」においても、「参らす」の方が「奉る」より待遇価値が高いことになった。これは、補助動詞「―奉る」「―参らす」の状況を裏づけるものといえよう。

三 上接動詞(1)

平家の場合と同様に、三語に上接する動詞(十助動詞)を意味の上から分類すると、

(イ)受身の助動詞「る・らる」のついたもの
(ロ)使役の助動詞「す・さす」のついたもの

(ハ)発話行動に関するもの

(ニ)精神活動に関するもの

(ホ)動作など、その他一般の行動に関するもの

の五種になる。「一奉る」「一参らす」「一申す」のそれぞれに、どれがどのくらい上接しているかを調べたのが、「表10」「表11」である。

【表10】 保元

計2	ホ	ニ	ハ	ロ	イ	一奉る	一参らす	一申す	計1	例
94 (149)	74 (119)	13 (22)	2 (3)	3 (3)	2 (2)					もちあつかはれ・をはれ・そだてられ・つかはれ・
39 (54)	34 (49)	1 (1)	2 (2)	1 (1)	1 (1)					ひかせ・なかせ・とぶらはせ・移させ・つぶさせ
36 (62)	4 (8)	8 (13)	22 (39)	1 (1)	1 (1)					呪咀し・すかし・陳し・なのり・ののしり・つけ・
151 (285)	96 (176)	22 (36)	24 (44)	5 (5)	4 (4)					さしをき・こめ・くだし・きり・しかかへ・書き・ほろばし・ひきぐ

【表10】 注① 数字は動詞の数。() 内はのべ語数、() に入っていないのは異なり語数。【表11】も同じ。

同じ。

② たとえばいで「一奉る」「一参らす」「一申す」の上接動詞の異なり語数の合計(2+2+22=26)と計1に示した値(24)が一致しないのは、「いのり」「すすめ」の二語が各々二つの補助動詞に上接していることによる。以下同様。

【表11】 平治

計2	ホ	ニ	ハ	ロ	イ	一奉る	一参らす	一申す	計1	例
57 (97)	43 (78)	6 (8)	4 (6)	2 (2)	2 (3)					たのまれ・おもはれ・ゆるされ・なされ
48 (64)	39 (52)	5 (8)	2 (2)	0 (0)	2 (2)					せさせ・かけさせ
9 (12)	3 (6)	1 (1)	5 (5)	0 (0)	0 (0)					すすめ・こしらへ・ささやき・よび・となへ・まうしをき・くどき・辭し
95 (173)	69 (136)	9 (17)	11 (13)	2 (2)	4 (5)					ゆきあひむかひ・みつつけ・みせ・ひつつへむつつかけとりつき・取り

【表10】【表11】をもとにして、「一奉る」「一参らす」「一申す」それぞれの中で、上接動詞(イ)がどれくらいの割合を占めるかを算出したのが【表12】【表13】である。その値は、たとえば保元の「一奉る」(異なり語数)では、(イ)2/94 (ロ)3/94 :

のようにして求めた。

ただ、その比率が(1)と(6)各に属する動詞数の違いの影響を受ける可能性も大きいので、全上接動詞中の(1)と(6)の比率も最下欄に示した。

最下欄の値と比べて大きいものは、その補助動詞が接統しやすい動詞と見てよいわけであるが、太枠で囲んだのがそれである。

保元 [表12]

ホ/計2	ニ/計2	ハ/計2	ロ/計2	イ/計2	
0.787 (0.798)	0.138 (0.147)	0.021 (0.020)	0.031 (0.020)	0.021 (0.013)	―奉る―
0.871 (0.907)	0.025 (0.018)	0.051 (0.037)	0.025 (0.018)	0.025 (0.018)	―参らす―
0.111 (0.129)	0.222 (0.209)	0.611 (0.629)	0.027 (0.016)	0.027 (0.016)	―申す―
0.635 (0.664)	0.145 (0.135)	0.158 (0.166)	0.033 (0.018)	0.026 (0.015)	計1

平治 [表13]

ホ/計2	ニ/計2	ハ/計2	ロ/計2	イ/計2	
0.754 (0.804)	0.105 (0.082)	0.070 (0.061)	0.035 (0.020)	0.035 (0.030)	―奉る―
0.812 (0.812)	0.104 (0.125)	0.041 (0.031)	0 (0)	0.041 (0.031)	―参らす―
0.333 (0.5)	0.111 (0.083)	0.555 (0.416)	0 (0)	0 (0)	―申す―
0.726 (0.786)	0.094 (0.098)	0.115 (0.075)	0.021 (0.011)	0.042 (0.028)	計1

平家でも同様にして表を作ると、次の通りである。(24)

[表14]

ホ/計2	ニ/計2	ハ/計2	ロ/計2	イ/計2	
0.765 (0.809)	0.065 (0.095)	0.045 (0.027)	0.08 (0.039)	0.045 (0.027)	―奉る―
0.657 (0.748)	0.157 (0.129)	0 (0)	0.037 (0.014)	0.148 (0.107)	―参らす―
0.391 (0.25)	0.173 (0.104)	0.413 (0.635)	0.021 (0.010)	0 (0)	―申す―
0.658 (0.735)	0.104 (0.105)	0.093 (0.081)	0.064 (0.029)	0.079 (0.047)	計1

平家の「―奉る」「―参らす」「―申す」それぞれが、どんな動詞に接統しやすいかについては、前稿で述べた通りであるが、追加事項を含めて、改めて述べると、次の通りである。

○「―奉る」には(1)(6)が多い。

○「―参らす」には(1)(6)が多く、(6)ものべ語数において多い。前稿で(25)に

ついで言及しなかったのは、上接動詞の側から出した結果を重んじたためであるが、「―参らす」が何に接統しやすいかという場合には、これらはあげる必要がある。

○「―申す」には(1)が非常に多く、(6)も異なり語数において多い。前稿で(2)に言及しなかったのも、「―参らす」の場合と同じ理由による。やはり補足の必要があろう。

保元・平治・平家に共通して、太枠で囲まれているものは、次の三項目にまとめることができる。

(1) 「一奉る」には(㊦)(㊧)が多い。(但し(㊦)は、保元ではのべ語数のみ)

(2) 「一参らす」には(㊦)(㊧)が多い。(但し(㊦)は、保元・平治ではのべ語数のみ。又、(㊦)も平家ではのべ語数のみ)

(3) 「一申す」には(㊦)(㊧)が多い。(但し(㊦)は、平家・平治では異なり語数のみ)

平家で出た結果は、「一参らす」に(㊦)が多いということを除けば、のべ語数のみなどという限定付きにせよ、保元・平治にも共通に認められるということになる。

そして、この状況は一応説明のつくものである。「一奉る」

「一参らす」に(㊦)(動作など一般の行動に関するもの)が多いのは、この二語が、特に平家・平治で用例数の多いことと相俟って、幅広く使われていることを示すものであろう。

又、「一奉る」に(㊦)(「す・さす」のついたもの)が、「一参らす」に(㊦)(「る・らる」のついたもの)が多いのは、語感によって説明することができる。

「一申す」に(㊦)(発話行動に関するもの)が多いのは、本動詞としての意味から当然とも言えるし、又、(㊦)(精神活動に関するもの)も多いのは、中古の「一聞ゆ」に(㊦)(㊦)が多かった事と同様の事情によるのではないだろうか。

四 上接動詞(2)

次に、「一奉る」「一参らす」「一申す」それぞれに、どのくらい漢語動詞が上接するか、又、それはどのような漢語動詞かを調べてみた。

[表15] 保元

計	一申す	一参らす	一奉る	二字漢語＋す	一字漢語＋す	和語＋一字漢語＋す	計A	全上接動詞B	A/B
3(5)			守護し 披見し 呪咀し 3(5)		拝し 1(2)	ひき具し 1(2)	5(9)	94(149)	0.053 (0.060)
7(15)	挙し・辞 し・奏し 陳じ・論 じう(12)	めんじ 1(1)					1(1)	39(54)	0.025 (0.018)
1(2)							5(12)	36(62)	0.138 (0.193)
11(22)							11(22)	151(265)	0.072 (0.083)

A/B以外の数字は動詞の数。

()内はのべ語数。()に入っていないのは異なり語数。

全上接動詞(B)は「表10」計2の値である。

A/Bとは各補助動詞における全上接動詞中の漢語動詞の比率であるから、この値が大きいほど、その補助動詞は漢語動詞

に接続しやすいことになる。値の大きい方から「一申す」「一奉る」「一参らす」の順である。

ただ「一申す」でも A/B は 0.138 (0.193) であるから、和語の方に圧倒的に多く接続し、漢語動詞にはむしろ接続しにくいように見える。しかし、全上接動詞中でも漢語動詞は少なく、その比率

は 0.072 (0.083) (左隅の値) であるから、これに比べれば「一申す」の A/B は大きく、故に「一申す」は漢語動詞に接続しやすいということになる。

このようにして「表15」を見ると、「一奉る」「一参らす」は漢語動詞に接続しにくいことがわかる。

なお、「一奉る」には三つの型の漢語動詞が上接するの、「一参らす」「一申す」の場合には一つの型だけである。

同様に、平治物語を調べた。

平治 [表16]

計	一申す	一参らす	一奉る
2 (3)			守護し・供養し 2 (3)
2 (2)		御幸なし 1 (1)	行幸なし 1 (1)
4 (5)	辭し・陳じ 2 (2)		害し・ぐし 2 (3)
8 (10)	2 (2)	1 (1)	5 (7)
95 (173)	9 (12)	48 (64)	57 (97)
0.084 (0.057)	0.222 (0.166)	0.020 (0.015)	0.087 (0.072)
			三字漢語＋す 二字漢語＋なす 一字漢語＋す 計 A 全上接動詞 B A/B

A/B の値は大きい方から順に、「一申す」「一奉る」「一参らす」であり、計における漢語動詞の比率(左隅の値)に比べて、値の大きいのは「一申す」「一奉る」である。故にこの二語は漢語動詞に接続しやすく、「一参らす」は接続しにくいということが言える。

又、「一参らす」「一申す」にはそれぞれ一つの型の漢語動詞しか上接しないが、「一奉る」には三つの型のものが上接するという点では保元と同じである。

ところで平家の場合は次のようであった。「一奉る」は漢語動詞に接続しやすいが、「一参らす」は接続しにくい。「一申す」はのべ語数では漢語動詞に接続しやすい。又、「一奉る」が多種の漢語動詞に接続するの、「一申す」は「一字漢語＋す」にしか接続しない、などである。

保元・平治・平家に共通しているのは

- (1) 「一参らす」が漢語動詞に接続しにくいこと
- (2) 「一申す」が漢語動詞に接続しやすいこと(但し、平家ではのべ語数のみ)
- (3) 「一奉る」が多種の漢語動詞に接続するの、「一申す」は一字漢語の動詞のみに接続すること

の三点である。

「―奉る」は平家・平治では漢語動詞に接続しやすく、保元では接続しにくいという異なる結果を得た。しかし、保元での接続のしにくさも「―参らす」ほどではないこと、又、「―奉る」は活発に多種類の漢語動詞に接続すること、などからいって、保元の状況にはなお検討の余地があるように思われる。

平家・平治の謙讓の補助動詞に上接する漢語動詞と、保元のそれとを比較してめだつのは、平家・平治では、動作など一般の行動に関する動詞(ホ)が多く、発話行動に関する動詞(ハ)が少ないのに、保元では逆になっているということである。

平家……	(ホ) 59	(ハ) 13	(ロ) 7
平治……	(ホ) 8	(ハ) 2	
保元……	(ホ) 8	(ハ) 14	

漢語動詞

そして、前述のように「―奉る」は(例)に接続しやすく、「―申す」は(例)に接続しやすいという傾向があるので、平家・平治では「―奉る」が多くの漢語動詞に接続しやすくなるのに、保元ではそうならないということが生じる。

つまり、たまたま保元には漢語動詞に(例)が少なかったために、「―奉る」の接続する機会が減ったと考えることができるわけである。

あるいは逆に、平家・平治ではたまたま漢語動詞に(例)が多かったため、「―奉る」の接続することが多くなったということ

もできるかもしれない。しかし、前述のような事情や、後述する「―奉る」の書きことば的傾向・公的性格などからいって、平家・平治の結果を偶然と考えるより、保元の結果をそう見る方がよりよいように思うのである。

五 話手の性別

会話・心中思惟・文書では、話手(書手)に男女の別が認められるわけだが、それによる謙讓の補助動詞の使い分けはないのかを調べてみた。

平家の会話では「―参らす」が女性の話手に、「―奉る」「―申す」が男性の話手に多く使われるという結果を得た。心中思惟・文書の例を加えて比を求めても、結果は同じである。ところが、保元・平治は平家と違うのである。

保元 [表17]

文書	心中 思惟	会話		話手	—奉る	—参らす	—申す	計比
		女	男					
男 4	男 13	2 1	60 30	語比	女のうちわけ			
		託宣(巫女)	乳母女房ら					
0	3	1 1	25 25	語比	女のうちわけ			
			女房たち					
0	1	0	23	語比				
4	17	3 1	108 36					

引用会話文のうち、二人の話手(引用する者とされる者)

そのうち3例は次の①③④である。

Ex⁹ 御ころざしあさからずおもはれ^① たてまつりし頭殿にもをくれ^② まいらせ^③、そのかたみにみ^④ たてまつらんと思ひつる

夜叉御前にもをくれ^④ たてまつる。(274頁)

延寿(頭殿の妻であり、夜叉御前の母)のことばであり、①②は頭殿に対するもの、③④は夜叉御前に対するものである。夫、頭殿に「―参らす」(②)を使った以上、娘、夜叉御前には待遇価値のやや低い「―奉る」を使おうとする心理が働いているのではないだろうか。特に②④の違いなど、それがきわだつているように思われる。そして、もし、このようなことがあるとすれば、これら③④も「―参らす」が使いにくいために、「―奉る」の選ばれた例ということになる。

Ex¹⁰ あはれ恋しきむかしかな。忠盛の時ならば、是ほどかろくはおもはれ^① たてまつら^②じ。(278頁)

池禅尼のことばである。亡夫、忠盛に対する「―奉る」であろうが、「忠盛」と呼び捨てにしているのであるから、それと対応させるには待遇価値の高い「―参らす」より、「―奉る」の方がふさわしかったであろうと想像される。

以上のようにして、保元・平治の中に「―参らす」より「―奉る」が特に選ばれた事情を考えることのできる例がいくつかある。他の作品を調査した上で、なお検討したい。

本動詞としての用法

本動詞「奉る」「参らす」の状況は次の通りである。

保元〔表19〕

会話		奉る	参らす
心中思惟	男		
男	1	2	12
	0		

どちらも男性の話手の例ばかりであり、補助動詞の状況と異なる。

平治では「奉る」に地の文の例しかないので、比較が不可能である。(例すべてが男性の話手、心中思惟の2例いずれもが女性の話手である。)

以上、本動詞としての用法からは何とも言えない。いずれにしても話手の性別という条件については検討の余地がありそうである。

六 書きことば・話しことば

平家では「―奉る」「―申す」は書きことば的性格が強く、「―参らす」は話しことば的性格が強いという傾向が見られた。保元・平治ではどうかだろうか。

文書・地の文をより書きことば的な文章、会話・心中思惟をより話しことば的な文章として、そこでの謙譲の補助動詞の使用状況を見ると、次の二表〔表20・21〕の通りである。

数字は謙譲の補助動詞の数

保元 [表20]

計	— 申す	— 参らす	— 奉る	補助 動詞	文章	
					文書	書きことば的
137	0	0	4		文書	書きことば的
					地	
					計	
128	23	26	62		会話	話しことば的
					心中 思惟	
					計	

書きことば的文章・話しことば的文章の補助動詞の総数の比(137:128)

128) に対し、「—奉る」は 74:75 であるから、やや話しことば的傾向があるといえる。しかし、「—奉る」のみに文書の例があり、しかもそのうち 2 例は漢文体の中で使われているから、むしろ書きことば的であるとも言えそうである。

「—参らす」は 25:29 であるから、明らかに話しことば的である。逆に「—申す」は書きことば的だといえる。

以上のように見ていくと、保元の場合は「—奉る」の比率にやや問題があるとはいえず、大体において平家の傾向に準ずるものといえる。

平治においては、書きことば的文章・話しことば的文章のそれぞれに現れる謙譲の補助動詞の総数の比(93:80)に対し、「—奉る」は 63:34 であるから、書きことば的傾向が強いと言える。又、「—参らす」は 26:38、「—申す」は 4:8 であるから、いずれも話しことば的傾向が強いことになる。

平治 [表21]

計	— 申す	— 参らす	— 奉る	補助 動詞	文章	
					文書	書きことば的
93	0	0	0		文書	書きことば的
					地	
					計	
80	7	34	30		会話	話しことば的
					心中 思惟	
					計	

以上、三作品に共通なのは「—奉る」に書きことば的傾向が見られること

(2) 「—参らす」に話しことば的傾向が見られること

の二点であり、「—申す」については、平家・保元では書きことば的、平治では話しことば的、と異なる結果が出ている。これは、平治の「—申す」が少ないためかとも思われるが、次のような事も考えられる。

平家・保元の書きことば的文章においては(1)（発話行動に關する動詞）が圧倒的に「—申す」に集中して接続しているのに、平治の書きことば的文章においては、そもそも(1)が少ない上に、(2)「—申す」に接続する比率が著しく小さいのである。

平家 46/58 保元 31/31 平治 2/8 (30)

平家・保元（書きことば的文章）で(1)のほとんどが「—申す」に接続しているのに、平治ではわずか 1/4 であるのが対照的である。

「―申す」はいに非常に接続しやすい語であるから、いが「―申す」に集中しなければ、「―申す」の出番は減ることになる。このような事情によつても、平治の書きことば的文章には例外的に「―申す」が少なくなっているのではないだろうか。「―申す」が漢語動詞に接続しやすく、公的場面に使われやすい（後述）ことなどからも、書きことば的傾向は認めてよいのではないかと思われるのである。

本動詞としての用法

例によつて、本動詞「奉る」「―参らす」の傾向を見ると、次の通りである。

保元〔表22〕

文章	補助動詞		文章	書きことば的	話しことば的
	奉る	参らす	地の文	会話	心中
計	6	6	12	12	2
				0	1
15			12	計	
				12	3

計（左端の値）の比が12:15であるのに対し、「奉る」は6:6であるから話しことば的だといえる。また「参らす」は6:12であるから話しことば的だといえる。

平治〔表23〕

文章	補助動詞		文章	書きことば的	話しことば的
	奉る	参らす	地の文	会話	心中
計	4	11	15	12	0
				2	0
14			14	計	
				14	0

文章中の例のみだから書きことば的、「参らす」は11:14だから話しことば的であると言える。

以上、本動詞においては、保元・平治とも、「奉る」は書きことば的、「参らす」は話しことば的であるという結果を得た。これは補助動詞用法の結果を裏づけるものと言えよう。

七 場面

次に、「―奉る」「―参らす」「―申す」の使われる場面が公的なものであるか、私的なものであるかを調べた。

保元では改まった、公的な場面に次の四種がある。

- (1) 大勢の聞手を意識したもの（129頁 成憲→僧衆など）
- (2) 奏聞（141頁 中院右府→内裏など）
- (3) 神仏のことば（59頁 権現→法皇）
- (4) 天皇・上皇などのことば（72頁 後白河帝→臣下）

但し、「天皇・上皇→臣下」の關係にあつても内容の私的性格

平治でも、計（左端の値）の比が15:14であるのに対し、「奉る」は書きことば的

が強いもの(127頁 崇徳上皇↓兵共など)は除外した。又、一般の個人どうしの会話であっても、その場に天皇・上皇が同席しているもの(92・93頁 信西↓義朝など)は公的場面として扱った。謙譲の補助動詞の使用状況は次のようである。

保元 [表24]

計				公的場面	その他
	―申す	―参らす	―奉る		
32 (1)	8 (1)	4 (1)	20 (1)		
79 2.468	15 1.875	22 (5.5)	42 (2.1)		

数字は語数。

() 内の数字は公的場面における語数を1とした時の比率。

公的場面・その他の場面にあらわれる謙譲の補助動詞の総数の比(1-

2.468)と比べると、「―参らす」ではその他の比率が高く、「―奉る」「―申す」では低い。つまり、「―参らす」はその他の場面に使われやすく、「―奉る」「―申す」は使われにくいことになる。これは逆に言えば、「―奉る」「―申す」は公的場面に使われやすく、「―参らす」は公的場面に使われにくいということであり、平家の結果と同じである。

平治においても同様にして公的場面を規定すると、保元であげた(4)~(6)に更に、神仏に對することは(8)頁 常葉↓仏など)が加わる。なお、重盛の、父清盛に對することは(208頁)に引用されている院宣は、重盛の予想するものであり、多分に重

盛による待遇が介入していると思われるので、その他の場面として扱った。謙譲の補助動詞の使用状況は次のとおりである。

平治 [表25]

計				公的場面	その他
	―申す	―参らす	―奉る		
12 (1)	3 (1)	3 (1)	6 (1)		
59 (4.916)	4 1.333	31 (10.333)	24 (4)		

計の比(1:4.916)と比べると、「―参らす」はその他の比率が高く、「―奉る」「―申す」はそれの低いことがわかる。これは、平家・保元と同じく「―奉る」「―申す」

は公的場面に使われやすく、「―参らす」は使われにくいことを示している。

以上のことから、平家の場合、「―奉る」「―申す」は公的場面に使われやすく、「―参らす」は使われにくいと述べたことは、保元・平治にも共通することが明らかになった。但し、平家で問題が残った、私的場面での使用状況については、保元・平治でも問題が残ることになった。

保元において私的場面(親子・兄弟・祖父と孫の間の私的な内容の会話)の用例数は、「―奉る」10、「―参らす」2、「―申す」2であり、右と同様にして比を求めると、「―参らす」「―申す」は私的場面に使われにくく、「―奉る」は使われやすいという結果を得る。「―参らす」「―奉る」については、

公的場面での状況から予想されるものとは反する結果である。

平家の場合、このようなずれを話手の性別によって一応説明してみたが、前述の如く、話手の性別については三作品共通の結果を得ていないので、今は何とも言えない。

平治においても私的場面の会話を、親子・夫婦・祖母と孫の間の私的な内容の会話としたが、その用例数は「一奉る」5、「一参らす」3、「一申す」1であり、同じく比を求めると、「一奉る」「一申す」は私的場面に使われやすく、「一参らす」は使われにくいという結果を得る。これも又、公的場面における結果から予想されるものとは異なる。

ところで、このように公的場面の状況に矛盾するものが私的場面の状況に現れるということには、私的場面でのことばづかいの自由さがその原因の一つとして考えられるのではないだろうか。公的場面ではその性格上、特に意識してふさわしいことばが選ばれるのに、私的場面ではそうではない。話手の自由によりまかされるから、時には公的性格を持つことばもまぎれこむというわけである。そして又、それが場違いと感じられない程度の公的性格しか、それらの語が持っていないのではないかととも想像されるのである。

本動詞としての用法

本動詞「奉る」「参らす」の比較である。保元の状況は次の通りである。

保元〔表26〕

	奉る	参らす	計
公的場面	1 (1)	4 (1)	5 (1)
その他	1 (1)	8 (2)	9 (1.8)

() 内は比

補助動詞の場合と同じである。私的場面の例は、「奉る」「参らす」でもない。

又、平治は「奉る」に会話の例がないので、比較が不可能である。「参らす」では会話12例中1例のみが公的場面の例である。私的場面の例はない。()

八 まとめ

以上、保元・平治・平家の三作品を比較しながら述べて来たが、共通点を整理すると、次のようである。

(一)「一参らす」は「一奉る」「一申す」より待遇価値が高い。

(二)「一奉る」は使役の助動詞「す・さす」を伴う動詞・動作な

ど一般の行動を表す動詞に接続しやすく、又、多種類の漢語動詞に接続する。書きことば的文章・公的場面に多く使われる。

(三)「―参らす」は受身の助動詞「る・らる」を伴う動詞・動作など一般の行動を表す動詞に接続しやすいが、漢語動詞には接続しにくい。話しことば的文章に使われやすく、又、公的場面に使われにくい。

(四)「―申す」は発話行動に関する動詞に非常に接続しやすい、又、精神活動に関する動詞・漢語動詞にも接続しやすい。漢語動詞の型は一種類のみである。又、公的な場面に使われやすい。

以上のうち、「はじめに」であげた平家の状況に比べてふえたものは、そのつど述べたような調査方法の変更によるものである。又滅った事柄については、該当個所で述べた通り、解釈のしかたによつては、必ずしも減らなくてもよいものとも考えられる。平家での傾向は、保元・平治でも大体においては認められるといつてよいようである。

(昭和52・9・6)

(1)「平家物語における補助動詞『奉る』『参らす』『申す』

(上)(下)」「『国文学研究』61・62集)

(2) 古典大系解説4頁

(3)「て」を介する場合は、物をさしあげるといふ意味の認められる例ばかりであった。

(4)「吊奉候はん」(166頁)但し、国文学研究資料館所蔵のマイクロフィルムによれば、「たてまつり」であることは明らかである。大系本の誤植と思われる。

(5)平家では会話・心中思惟・文書の場合、用例数を多くとるために、同一文章内の対応を調べた。しかし、対応の安定度にやや不安があり、常に同一文内での対応状況によつて裏づけたので、今回はあえて同一文章にまで広げてみることはしなかった。

(6)天皇・東宮以下の皇族の他、朝廷もここに入れた。為義・義朝・信西・諸卿など、上述の三種以下のものをすべて含む。

(7)二人以上併記されている場合は、最上位者の地位によつて所属を決めた。

(8)一部分には尊敬語を含まない。但し、「―なる」「―あり(なし)」は別。

(9)「―なる」の摂関1例は「関白殿は(略)内裏に御しこうなり」(65頁)であるが、これについて古典大系では

本書では前型(筆者注、「―なる」をさす)は「崩御なる」「御幸なる」などに限るので、天・学本及びすぐその後の本文の如く「御祇候あり」がよからう。

と、注五四で述べている。本文に問題があるなら、

「―なる」にも撰関の例はないことになる。

(11) 心中思惟の対応例はない。

(12) 会話の話手・聞手の関係を上向き・水平・下向きとす

ると、「候ふ」が使われるのは上向き関係(話手下位、

聞手上位)で最も多く、「候ふ」が使われないのは下

向き関係で最も多い。(保元・平治と同じ)

(13) たとえば、平治の宗清から頼朝へのことば(776頁8～

11行)などでもそれをうかがうことができる。

(14) この四分類に意義があることは、尊敬の助動詞・補助

動詞の使われ方(前述)によっても明らかである。

(15) 為義・義朝・頼朝などの源氏の一族や、信西・信頼な

どである。

(16) (受手↑話手)で示すと、(神仏↑人)(皇族↑一般の

人)(主人↑家来)(師↑弟子)(血縁・姻戚関係の目

上↑目下)の五種である。

(17) 一般に相対敬語的な傾向も見られることから、ありう

ると考えられる。

(18) 『国文学研究』61集117頁「表6」の②

(19) 他の場合には、すべて「―参らす」の待遇価値が最も

高い。

(20) 「―参らす」「―申す」「―奉る」の順だけである。

(21) 用例数は次の通りである。

「保元」奉る……地6・会話2・心中思惟1

参らす……地6・会話12

「まいらせ上ぐ」(172頁)は除いた。

「平治」奉る……地4

参らす……地11・会話12・心中思惟2

(22) たとえば「―奉る」に例が大きな割合で使われている

としても、全体としても例が多ければ、それが各補助

動詞の中に多く入り込むことになるから、ある程度は

当然と言える、ということなどをさす。

(23) 保元(異なり語数)でいえば、(1)4(151)(4)5(151)……

のようにして求めた。

(24) 異なり語数については、『国文学研究』62集51頁に示

してある。「表14」

(25) 『国文学研究』62集50頁の下段

(26) 同右誌53頁

(27) この点については、森野宗明氏が「古代の敬語Ⅱ」

(『講座国語史5 敬語史』149頁で述べておられる。

(28) この傾向が漢語動詞に接続する場合に限っても見られ

ることは次の通りである。

〔平家〕

「奉る」 53 例中 (中) 46 例
「申す」 12 例中 (中) 11 例

〔平治〕

「奉る」 7 例すべてが (中)
「申す」 2 例いずれも (中)

〔保元〕

「奉る」 9 例中 (中) 7 例
「申す」 12 例すべてが (中)

(29)

書きことば的文章中の謙讓の補助動詞に (中) が上接する比率は

平家 58/47?、保元 31/13?、平治 8/93

で、平治の値が最も小さい。

(30)

これほど、 (中) の「申す」への集中度が低くなることは、三作品の話しことば的文章においてもない。

(31)

保元では (中) の語数のみ。

(32)

保元・平治では (中) の語数のみ。

(33)

平家では (中) の語数のみ。

(34)

平家・平治では異なり語数のみ。

(35)

平家では (中) の語数のみ。

「国語学 研究と資料」第3号正誤表

ページ・段・行	誤	正
5 上 11	接続しいやす	接続しやすい
6 上 14	金刀羅宮	金刀比羅宮
9 下 6	さふらふ	さぶらふ
下 17	候へ	<u>候へ</u>
下 20	候	<u>候</u>
左 1 9	同字	同音
10	同音	同字
2 24	いろおう	いちおう
3 6	検策	検索
8 右 34	／かいし 8-4オ2	(削除)
15 右 1	藕	藕
右 2	藕	藕
29 左 11	4-	4-
33左 左 35	ス□イ	スイ
34 右 13	☆	＊
36 左 22	ゾウ	ゾウ